新潟大学教育学部附属教育実践研究
指導センター研究紀要，5 (1986)

# 人物や地域の教材を通して学習意欲を高める授業

## ― 鎌倉幕府の成立（親鸞を中心にして）―
## 中学校１年生歴史的分野

赤　松　　浩*

**1. 単　元**　鎌倉幕府の成立

**2. 目　　標**

(1) 平氏の滅亡から鎌倉開府までの政治の動きについて、封建制度のもとで武士勢力が台頭し、朝廷と幕府の二重支配体制が出現した事実を中心に説明できる。

(2) この時代を生きた特徴的な人物である親鸞の生涯を調べることを通して、次々に新しい仏教が現れてきたわけを説明し、封建制度のもとでの農民の不安や苦しみを指摘できる。

**3. 指導の構想**

(1) 単元の価値

鎌倉時代は、日本の歴史はじまって以来、初の武家政権が登場した時代であった。鎌倉幕府の確立までの間に、武家方は公家政権から様々な権限を奪い取っていった。その最たるものが荘園内に地頭を送りこみ経済力を手にしたことであった。また、承久の乱（1221年）では武家方は公家方を武力でもってうち破った。こうして鎌倉幕府は名実ともに整っていき、古代から封建時代へ、公家の世から武家の世へと転換がなされていった。

親鸞の越後への流罪は、こうした激動の時代の中で起こった。この親鸞の流罪を、公家と関係の深い旧仏教と新仏教の対立という視点を切り込み口としてとらえ、民衆の中で生きた親鸞の人間像を明らかにすることを通して、大きな時代背景を把握させたい。

(2) 生徒の実態

生徒は小学校六年生の歴史学習で親鸞が新しい仏教を広めた人物であることを知っている。また、クラス45名中で自宅のお墓が浄土真宗のお寺にある者は21名（46%）にものぼっている。しかし、親鸞の具体的な人間像や念仏の教え、そして鎌倉時代の様子（時代相）を説明できる者は、半数にも満たない。そこで、本時の親鸞の流罪に関する資料や旧仏教教の腐敗ぶりを示す資料を検討する場面では、次のような問題点が予想される。

① 親鸞の越後への流罪の原因を、朝廷との対立としてのみとらえてしまい、公家貴族に私物化されていた旧仏教との対立という視点にまで考えがおよばない。

② 親鸞の教えが民衆に浸透していったわけを、その背後にあった武士や農民の悩みや苦しみと結びつけて、大きくこの時代の様子と関連させて説明することができない。

* 新潟大学教育学部附属新潟中学校

(3) 学習意欲の見取り

本時の学習場面で、生徒に次のような様相が見られたとき、生徒が意欲をもって取り組んでいると考える。

① 読み物資料「親鸞について」を読み、親鸞の生き方考え方について、自分なりの解釈や疑問を下記の例のように２つ以上挙げることができる。（追求カードに記入させる。）

- 比叡山を降りたことに関して。
- 法然の弟子となり念仏の教えを広めいいたことに関して。
- 旧仏教側から訴えられ、越後に流罪になったことに関して。など。

② 親鸞の教えの内容および意味を追求する場面において、次のような解釈や疑問を出し、旧仏教との違いを指摘できる。

- 「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えればだれでも救われる、という教えはわかりやすいので一般民衆に広まった。
- 法然の念仏の教えを一歩進めて「善人は救われるのはあたりまえだ、まして悪人はなお救われる」と説いた。
- 妻を持つのは今はあたり前である。この時代の僧はなぜ妻を持つと悪かったのか。など。

(4) 具体的な手だて

ア．既習内容を手がかりに、親鸞の生きた時代の時代相がとらえられるように教材構成する。

- ＶＴＲを利用し、源平の合戦、頼朝の幕府創設などの事実をとらえさせる。
- 熊谷直実の資料をもとに、封建制度の意味を説明させる。

イ．年表を利用し、この時代に次々に新しい仏教が現れているのはなぜか、という疑問を持たせる。

- 親鸞という人物を浮かび上がらせるために、年表に旧仏教と新仏教を記入し、この時代に新仏教が続々と誕生していることに気づかせる。クラスの宗派別人数をもとに浄土真宗の開祖は親鸞であることを確認する。

ウ．親鸞の顔や流刑の地をパネル写真で示し、具体的なイメージを持たせる。

- 「親鸞とはいったいどのような人物であったのか、知りたい」という生徒の興味と関心を盛り上げるため、親鸞および流刑の地のパネル写真を提示する。

エ．読み物資料「親鸞について」を配布し、気づいたことを２つ以上挙げさせる。

- あくまでも生徒の興味と関心を尊重し、△△について考えなさいという指示でなく「気づいたことを２つ以上挙げなさい」と指示し、生徒の疑問や解釈を表出させ、追求意欲を持たせるようにする。

オ．追求カードを利用する。

- 挙げた事実、本時の課題、追求の内容などを記入させ、教師の机間巡視を通しての指導の一助とする。また、授業後に回収し生徒の追求の様子を把握する。

(5) 時間配当（６時間）

第一次　幕府政治のはじまり　　3

第二次　鎌倉時代前期の生活と文化　　3（本時 1/3）

## 4. 指導の実際

(1) ねらい

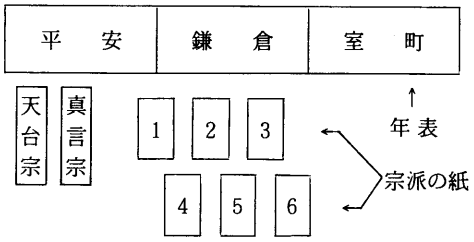
親鸞の教えが広まったわけを、旧仏教界の腐敗とそれに飽き足らず民衆の中で生活した親鸞の生き方考え方を比較することによって、説明できる。

(2) 授業記録

T．P君、今まで政治のことを学習して来て、すごくよい疑問を出していましたね。それを発表して下さい。

$P_1$ 今まで平安時代とか鎌倉時代とか習って来て、上の方の朝廷とか幕府とかのことはわかったが、その下にいた人、農民など位の低い人のことはわからない。

T．一般の人々の生活に結びつくと思うが、この前宗派調べをしましたね。（宗派の調査結果の紙を掲示する。）―資料1参照―（生徒に問うて、臨済宗、曹洞宗、真言宗、天台宗、日蓮宗の広まった年代を確認し、宗派の年表中に掲示する）。（浄土宗と時宗も加える）。




1. 浄土宗　2. 浄土真宗
3. 日蓮宗　4. 臨済宗
5. 曹洞宗　6. 時宗

$P_{全}$（宗派名のはられた年表を見つめる）。

T．この年表を見て気づいたことを発表しなさい。

$P_2$ 鎌倉時代の方が仏教がより多く広まった。

$P_3$ 平安時代の宗派は山にこもったりして厳しい宗教だった。鎌倉時代の宗教は庶民に広まった。

$P_4$ 色々な特徴ある宗教がたくさん出た。

$P_5$ たくさん出たので、武士だけでなく農民も信じるようになった。

T．民衆にも広まったわけだが、どれか代表を取り上げて調べてみたいと思う。

$P_6$ ここはやはり、宗派調べで一番人数の多かった浄土真宗を調べたい。私の家も浄土真宗です。

T．（親鸞のパネル写真を出す）実は先生の家も浄土真宗です。この人親鸞、わかりますか。

P．（ほとんどの者が挙手）。

$P_7$ すごく年とっている顔だ。

$P_8$ 眼つきが鋭い。ごろつきに見える。（ま

（読売新聞社親鸞より）

わりの者笑う)。

T．親鸞についての資料を配ります。追求カードに自分で何か気づいた点を2つ以上書きなさい。

$P_{全}$ (資料を読み気づいた点) ―資料2参照―

- 親鸞は貴族に生まれたが、仏教の道をなぜ選んだのか。
- 親鸞や法然を他の寺院がいやがったのはなぜか。
- この時代に、よくこんなに長生きできた。
- 僧は家族を持ってはいけないのに、妻を持った。正式に結婚した。
- 浄土宗と浄土真宗の違いは何か。
- 越後へ流された。越後へ流されて、農民の苦労を知って考えを大きくした。
- 「善人でさえ、死んで極楽へ行ける。悪い人はなおさらだ」の意味がわからない。など。

$P_9$ 親鸞が本当に念仏の教えを広めたのは、越後に流されてからだと思う。だから流される前のことと、後のことに分けて考えたらよい。

(板書された気づいた点を、流される前と後に分ける)。

T．越後に流されたのは何年か。

$P_{全}$ 1207年。

T．流される前の親鸞にとって一番大きなできごとは何だったか。

$P_{10}$ 法然に会ったということだと思う。なぜかというと資料にも、これが自分の歩む道を求めていた親鸞の心にかなったのです。と書いてあるから。

$P_{11}$ その前に、このようなことを正さなければならないと思った、と書いてある。これは世の中の乱れなのだけれど、それをなおそうとした。

T．親鸞と法然はどこで会ったのか。

$P_{12}$ 京都の街の中

$P_{11}$ 私は法然に会ったことよりも、乱れを正そうとしたことが大切だと思う。だから比叡山は関係なく、自分の考えと同じ法然に出会ったのだから。

$P_{12}$ 関連して、私は街の中で法然に出会ったと思う。理由は、親鸞が越後に流されるもとになったのは法然とともに念仏の教えを広めた、法然の弟子になったからだ。法然は京都の街で広めていた。比叡山はもともと天台宗で、そこでは広めていなかったはずだ。

T．$P_{12}$ 君のいうように街の中で出会ったのかもしれない。その前に親鸞はなぜ山を降りたのか。

$P_{13}$ 世の中が乱れに乱れていた。それを正そうと思って、自分の力ですくいを求めようとした。

T．今のに関連した資料がここにあります。(「仏教の世界」を配布して)、次時はここからやります。―資料3参照―

## 5. 反　　省

(1) 教材の提示や発問について

年表、パネル、読み物資料などその準備には相当な時間をかけたが、有効に利用できなかった。それは次のようなことに問題があったからである。

ア．年表を示して「どうか」という発問ではなく、「どんなことが考えられるか」とか「なぜこの時代に新しい仏教が続々と起こったのか」などと発問したらよかった。

イ．パネル写真も同様で、単に親鸞に親しみを持たせるだけでは不十分である。また「ごろつきみたいだ」という発言もあった。写真を提示して「この親鸞の目はどこを見ているのだろうか」などの働きかけが必要である。

ウ．読み物資料を配布して「気づいた点を２つ以上挙げよ」という指示も有効ではなかった。これでは課題をほんとうに焦点化できない。疑問と事実も分ける必要がある。

(2) 生徒の意欲を読み取る観点や方法について

ア．追求カードに書かせることは、生徒の活動を把握でき有効である。

イ．机間巡視をただ漫然と行っていたのでは指導にならない。もっと一人ひとりに声をかけ、つまづいている生徒には指導・助言をすることが必要である。

ウ．本時では、教師と生徒の一問一答が多く生徒同志の意欲的な話し合いの場面に欠けていた。教師側で意図的にそれを設定すべきであった。

エ．事実を挙げることと、疑問を挙げることがごっちゃになってしまった。はっきりと課題を焦点化できるような働きかけが必要である。

(3) 教材構成は学ぶ意志を引き出し、育てるものとなっていたか

答えは否である。これは以下のようなことから言える。

ア．授業の冒頭での$P_1$の発言は、前時の後半に出て来たものを、教師が思いつきで取り上げたのである。取り上げたことは是としても、そのフォローが全くといってよいほどなかった。親鸞と庶民の結びつきを中心とした教材構成をもっと工夫できると考えられる。

イ．親鸞を中心にして鎌倉時代前半の民衆の生活や文化に焦点をあてるはずであったが、政治的なことを前時までに学習してしまった後だったので、ダイナミックな展開とならなかったことを反省している。

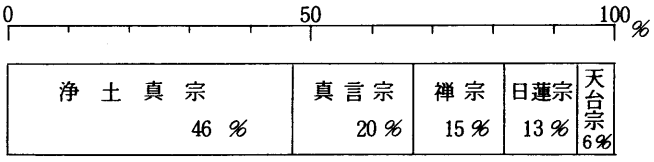
ウ．親鸞という人物をこの時代の特徴的な人物として取り上げる意義は、ある程度認められたと考える。しかし、親鸞という人物そのものを学ぶのではなく、人物でこの時代相をとらえさせるというねらいは達成されていない。今後もこの課題を研究していきたい。

## 6. 参 考 資 料

**（資料１）**

１年２組仏教の宗教派調査結果　〔調査人数45名（生徒全員）〕

仏教の宗派調べ結果発表グラフ




| | |
|---|---|
| 浄土真宗 | 21名 |
| 真言宗 | 9名 |
| 禅宗 | 7名 |
| 日蓮宗 | 6名 |
| 天台宗 | 2名 |

上のグラフを見て気付いたことを書いてみよう！

。

。

。

※　これは生徒が作成し、クラス新聞にのせたものである。

**（資料２）「親鸞について」**

(1) 親鸞の生いたち

「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えて、仏におまいりをする人の姿をみたことがあるでしょう。そのような教えのひとつ、浄土真宗を開いたのが親鸞です。

親鸞は、1173年（承安３年）、京都の貧しい貴族の家に生まれたといわれています。８才のころ、比叡山延暦寺に入り、僧としての道を歩みはじめました。

親鸞が仏教を学んでいたのは、ちょうど、平安時代の終わりから鎌倉時代のはじめごろにあたります。

このころの日本は、自然の災害や、源氏と平家の戦いがつづき、この世の終わりが近づいたかのように人びとの目にうつっていました。けれども、政治や社会の中心が、古くからの貴族から武士にうつろうとする、新しい時代の動きでもあったのです。

(2) 越後に流された親鸞

当時の社会と同じように、坊さんたちの生活ぶりも乱れていました。これをみた若い親鸞は、このようなことはなんとかして正さなければならないと思いました。

そのころ、京都の町の中で法然という坊さんが、あらゆる身分の人を相手に、「心から阿弥陀仏を信じ、念仏を唱えれば、罪からすくわれるのだ。」と説いて、多くの信者をあつめていました。これが、じぶんの歩む道をもとめていた親鸞の心にかなったのです。すぐに法然のもとに弟子入りをして、活動をはじめました。親鸞が29才のときでした。

このような親鸞の動きを、古くからの寺院が喜ぶわけがありません。天皇や貴族に、あることないことを訴え、とうとう親鸞は越後に追放されることになってしまったのです。

1207年の春、京都から北陸まわりの長旅のすえ、親鸞は越後につきました。船を使うことが多かったのでしょう。直江津海岸（居多の浜）に、親鸞上人上陸の地の記念碑がたてられています。このとき、親鸞は35才でした。

当時の流人は、はじめの一年間だけ必要な米と塩がわたされ、そのあとは、全部じぶんでつくって食べていくように定められていました。そのうえ、親鸞は、念仏の教えをひろめることも禁じられ、僧の身分さえ許されず、藤井善信という名をあたえられ、ふつうの人とされていたのです。

罪を許されるまでの４年間、国府の地をはなれることもできず、じぶんで田畑をたがやす生活のなかで、なにを思い、なにを考えたことでしょう。

じぶんの力ではどうしようもない苦しみをなめている人びと ── その多くは働く農民でしたが、この人びとを仏の力ですくわなければならない、という強い願いが胸のうちにあったにちがいありません。

親鸞がその罪を許されたのは、５年後のことでした。

食べていくために田畑へ出て、農民の苦労を味わい、それ以外はただひとり草庵で仏の道を考えつづけ、この期間に、親鸞の考えは大きく成長したにちがいありません。

「善人でさえ死んで極楽へ行けるのなら、悪人はなおさらのことだ。」という、苦しみにあえぎしいたげられた、多くの名もない人びとをすくおうとする浄土真宗のもとになる考えは、この時代に育てられたものと思われます。

(3) 親鸞をささえた恵信尼

偉大な宗教家としての親鸞の特色のひとつに、僧は妻をめとり家族をもってはならないという、それまでのいましめをやぶり、正式に結婚をしたことがあげられます。

ふたりは、親鸞が越後に流されてまもなくむすばれました。親鸞が35才、恵信尼が26、7才という、当時としてはたいへんに年をとってからのことでした。

恵まれぬ人びとを仏の力ですくう道を、親鸞は必死でもとめていたのですが、そのためにはその人たちになりきってみることが必要でした。また、平等ということを基本にしていた親鸞にとって、当時の女の人をひくくみる考え方ががまんならなかったにちがいありません。

（「史跡と人物でつづる新潟県の歴史」光文書院刊より）

**（資料３）「仏教の世界」**

奈良時代、平安時代を通じて、僧りょたちは、自分たちがつみあげた修行の成果をふまえて、国家のため、公家のため、公家貴族のため、政権の安泰と繁栄を祈ることを使命と感じて生きていた。

奈良には興福寺（藤原氏の氏寺）があり、京都に近い比叡山には延暦寺があって強大な力を持っていた。その力とは、一つは貴族のために祈ることによって得られた土地すなわち荘園である。この荘園からの収入によって、上記の二寺院以外の大寺院もばく大な収入を得ていたのである。もう一つの力とは、僧兵である。

これらの寺院で養われていた僧兵は、寺院の色々な要求をおしとおすためにしばしば都におしかけた。朝廷は、僧兵の乱暴をおさえるために武士の力をかりなければならなかった。

そして、平安時代の中ごろには、大寺院は公家貴族の子弟の最大の就職先となってしまった。貴族出身の僧は仏教の世界における幹部候補生であった。身分の低い家から入寺した僧が、十年、二十年、三十年の研修、学問の末に、やっと手に入れることのできる高位高官を、年はもゆかぬ若僧が実家の家柄だけの条件によって手にすることができたのである。

仏教の世界は、まさに公家貴族の社会がそのままここに横すべりしたような世界となった。当然のなりゆきとして無気力と怠惰と荒廃が僧たちの心をむしばんでいった。たとえば寺院の中で、次のようなあってはならないことが行われていた。○僧が美服をまとう。○ばくちをする。○夜、女人を宿泊させる。○鳥、魚などの肉を食べる。

このように腐敗しきった旧仏教の殿堂比叡山延暦寺に、絶縁状をつきつけて山を降りたのが、法然であり親鸞であった。

（日本放送出版協会「親鸞」より）

※本稿は筆者が昭和60年２月19日に、附属新潟中学校で実践したものを、まとめたものである。